

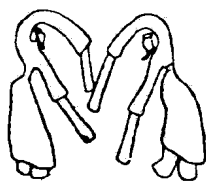
明清の戯曲

田仲一成

田 伸 一 成

明清の戯曲

— 江南宗族社会の表象 —



創文社刊

〔たなか・いっせい〕1932年東京に生まれる。1955年
東京大学法学部卒業。1962年同大学院人文科学研究
科博士課程（中国語学・中国文学専攻）修了。北海道
大学文学部助手を経て、1968-72年熊本大学法文学部
講師、助教授。1972-93年東京大学東洋文化研究所助
教授、教授。1993-98年金沢大学文学部教授。1998-
2000年3月桜花学園大学教授。現在 東京大学名誉
教授、文学博士（東京大学）。

〔著書〕『中国祭祀演劇研究』1981年、『中国の宗族と
演劇』1985年、『中国郷村祭祀研究』1989年、『中国
巫系演劇研究』1993年、『中国演劇史』1998年、（以
上、東京大学出版会）



中国学芸叢書
(9)

〔明清の戯曲〕

二〇〇〇年九月二五日 第一刷印刷
二〇〇〇年九月三〇日 第一刷発行

著 者 田 仲 一 成

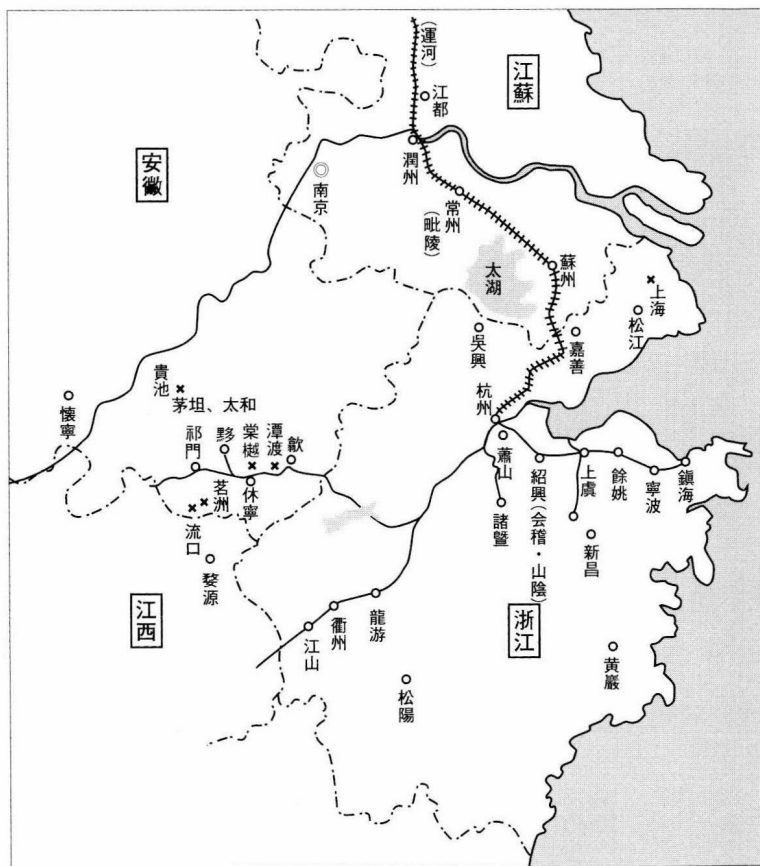
発 行 者 久 保 井 浩 俊

発 行 所 株式会社 創 文 社

〒101-0063 東京都千代田区麹町二六六七
03-3233-7011

ISBN4-423-19423-6
Printed in Japan

精興社印刷
鈴木製本所



本書関連江南地図

目次

序説 元明間の祭祀演劇の変化とその社会背景

——農村の宗族構成から見た展望——

三

一 小姓雜居村落の演劇環境

五

二 大姓村落の演劇環境

五

第一章 明代江南宗族の祭祀体系

八

序節 外神系祭祀と内神系祭祀の關係——安徽省徽州府歙縣潭渡黃氏

八

第一節 外神祭祀

三

第二節 内神祭祀

六

一 小宗祠（小堂）の成立

九

二 中宗祠（逸民祠）の成立

三

三 大宗祠（統宗祠）の形成

三

第三節 小結

五

第二章 明代江南宗族の演劇体系

序 節 祭祀演劇の環境——安徽省徽州府休寧県茗洲吳氏

第一節 外神祭祀

第二節 内神祭祀

第三節 演劇統制

一 外神系演劇

二 内神系演劇

第四節 小 結

第三章 清代江南宗族による外神祭祀演劇の再編成

序 節 清代江南同族村落の祭祀組織の再編成

第一節 郷村の社廟演劇組織の再編成

第二節 市鎮の社廟演劇組織の再編成

第三節 文武科挙神に対する演劇組織の形成

第四節 小 結

第四章 清代江南宗族による共同体規制演劇の強化

序 節 江南宗族の共有地支配の発想

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

二七

第一節	水源地保全禁約の演劇	二四
第二節	貯水池保全禁約の演劇	二三
第三節	墳山竹木保全禁約の演劇	三七
第四節	宗祠・墓祠保全禁約の演劇	二〇
第五節	小 結	一五
第五章	清代江南宗族による宗祠演劇の拡大	一五
序 節	宗祠演劇拡大の背景	一五
第一節	個別祖先に対する寿誕祭祀演劇	一五
第二節	祖先群に対する季節祭祀の演劇	一六
一	元宵燈祭の祀祖演劇	一六
二	春分・清明の宗祠演劇	一七
三	秋祭の宗祠演劇	一八
四	冬祭の宗祠演劇	一八
第三節	進主（祖先神位入祀）の演劇	一九
第四節	科挙及第者の祀祖謝恩演劇	一九
第五節	超幽追薦演劇	一九
第六節	小 結	二〇

第六章 社祭演劇における宗族の戯曲選好

序 節 社祭演劇に対する宗族の期待

第一節 節婦類

第二節 孝子類

第三節 忠臣類

第四節 功名類

第五節 風情類

第六節 遊賞類

第七節 超幽類

第八節 小 結

第七章 宗祠演劇における宗族の戯曲選好

序 節 宗祠演劇に対する宗族の期待

第一節 頌 類

第二節 大雅類

第三節 小雅類

第四節 風 類

第五節 超幽類

二〇六

二〇六

二〇七

二〇六

二〇八

二〇八

二〇九

二〇九

二一〇

二一〇

二一一

二一一

二一二

二一二

二一四

二一四

二一五

第六節 小 結

二六三

第八章（上） 宗族演劇の戯曲世界

——宗族内部の戯曲世界——

二六五

序 節 宗族の内部統制に關わる戯曲世界

二六五

第一節 慶寿類

二六六

第二節 伉儷類

二六七

第三節 誕育類

二七五

第四節 訓誨類

二七八

第五節 激勵類

二八二

第六節 分別類

二八六

第七節 思憶類

二九一

第八節 捷報類

二九五

第九節 小 結

三〇〇

第八章（下） 宗族演劇の戯曲世界

——宗族外部の戯曲世界——

三〇二

序 節 宗族の対外交流に關する戯曲世界

三〇三

第一節 訪詢類

三〇

第二節	遊賞類	三二
第三節	宴会類	三二
第四節	邂逅類	三二
第五節	風情類	三三
第六節	忠孝節義類	三六
第七節	陰徳類	三三
第八節	栄会類	三五
第九節	小 結	三七

結 章 宗族演劇の現段階

一	上演戯曲の内容	三八
二	宗族の伝統的觀念の持統	三四
三	孤魂祭祀の觀念	三七

注

注引文献

あとがき

索引

明清の戯曲——江南宗族社会の表象

序説 元明間の祭祀演劇の変化とその社会背景

——農村の宗族構成から見た展望——

中国の演劇、特に悲劇は、横死して葬られず、衣食を求めて空中を浮遊している孤魂・遊魂に対する村人の恐怖を背景として、この恐怖に対応して僧侶道士がこれらの村を襲う孤魂に対して行う鎮撫の儀礼から発生した。このことについては多くの証拠を挙げることができる。孤魂には、多くの種類が考えられてきたが、村落集団にとって、隣接する他の村落との戦闘で戦死した若者の靈魂や、他の村から嫁いできて舅姑との不仲を解決できずに自殺したり、あるいは難産の為に死亡したりした女性の死者の靈魂などは、村落の生存維持のために犠牲になった孤魂であり、村人としては彼らに同情するとともに深い負い目をおっており、その恨みはその深さの故に村に災害をもたらすものとして畏怖されていた。村人としては、これらの孤魂に衣食をあたえることで、その恨みをなだめ、恨みに由来する災害を防止することが必要と考えられた。かくして主として戦死者（英雄と呼ばれる）と女性自殺者の孤魂を鎮めるために、五代〜北宋末に江南道士によって黄籙齋と呼ぶ鎮魂儀礼が勃興し、以後、江南の村落に流行した。その祭祀慣行は江南各地において、現代にまで及んでいる。

一般にこの祭祀の大規模なものは、寒気が増してきて山野に食物がなくなり、孤魂が飢え凍える秋冬に舉行されることが多かったが、後世では、寒気が去り陽氣が戻ってくる春にも、まだ山野に食物の乏しいこと

を思いやって、春の神迎えの祭りに付随して小規模な形で挙行される事がある。いずれの場合においても祭祀の場に神を迎え、併せて戦死者、自殺者の孤魂を招き寄せ、僧侶道士による読経と科儀を捧げ、更に孤魂が食べる大量の食物、及び孤魂が冥界で使う紙衣、紙銭などを大掛に施与する形を取る。この場合、儀礼の過程で祭祀の場に招かれた英霊や女鬼が祭壇に昇り、僧侶道士を介して神々に自己の不運を訴える場面があった筈であり、この場面が後世の悲劇文学を生む土台となったものと推定される。このような推定の上に立って考えると、孤魂祭祀の主たる対象であった英霊を主人公とする英雄鎮魂劇と、女性自殺者（烈婦）を主人公とする烈婦鎮魂劇こそ、中国演劇の成立初期の形態であり、また、この鎮魂祭祀の効用が信ぜられる限り、あらゆる村落において、この両者は車の両輪の如く、常に併存して維持され、伝承されるべき筈のものであった。しかるに事實は必ずしもこの道筋に沿って進行してはいない。すなわち、中国演劇史の初期段階に当たる元代雜劇においては、北方中国を中心に英雄悲劇、烈婦悲劇の両者は併存しているが、続く明代の江南演劇の段階においては、英雄悲劇は全く影を潜め、専ら烈婦悲劇のみが隆盛を極めるのである。初期演劇の主流である英雄悲劇が、何故に江南において、特に中国演劇の成熟段階である明代において消滅したのか。この原因を明代江南村落の条件を分析することを通して解明することが本書の目的である。問題の鍵は、演劇を支える社会背景の地域差、或いは時代差を明らかにすることにあるように思われる。特に中国農村の基礎的な構成要素である宗族のあり方の地域差、時代差を分析することが重要である。この宗族構成の地域差を探るといふ観点から、分析の軸を立ててみると、所属者の少ない小規模な宗族集団（小姓）が多数集まって混成的に村を構成している「小姓雜居村落」（雜姓村落）と、所属者が非常に多い大規模な宗族集団（大姓）が単独で、或いは極く少数で、独占的或いは寡占的に村を構成する「大姓村落」とを区別して、考

察することが有効であると思われる。以下、この軸に沿って、問題を概観してみよう。

一 小姓雑居村落の演劇環境

一般に、小姓雑居村落においては、各小宗族の間の関係は平等で、隣村との械闘など、外敵に当たる場合には、各姓は平等に戦闘員を出す。戦死者も各姓から平等に出てくる。従って、戦死者の英霊に対する同情、哀悼、畏怖の感情も各姓が平等に共有する。この条件では、英霊を祀る祠廟（英雄祠、義祠などと呼ばれる）が村の費用で盛大に造営され、英霊鎮魂の祭祀は常に村の重要な行事として春秋の社祭に併せて定期的に举行され、しかも絶えることなく持続する。英雄を鎮撫し、その活躍を想起するための英霊鎮魂劇はこの環境で最もよく発達し、力強く持続する。一方、各姓の平等な関係に助けられて、他の姓から嫁いでくる婦女にとって、舅姑の圧力は相対的に大きくなく、自殺者は少ない。このため烈婦祭祀の機会は少なく、烈婦鎮魂祭祀も、その延長である烈婦鎮魂演劇も目立つほどの発達はしない。この環境では、英雄悲劇と烈婦悲劇は並存するが、英雄悲劇が主流を占め、烈婦悲劇は付随的位置に留まる。

中国全土を見渡せば、この型の雑姓村落は圧倒的に多い。特に北方中国、西南中国はすべてこの型の雑姓村落で占められている。

二 大姓村落の演劇環境

単一または少数の大姓が支配する大姓村落の状況は、上述の雑姓村落とは全く逆の関係になる。ここでは、隣村との械闘など、外敵との戦闘に直面した場合、戦闘に当たるのは大姓に支配されている小姓であり、大

姓からは戦闘員を出さない。従って、戦死者は小姓からのみ出る結果となる。例えば、安徽省徽州府祁門県查湾村は、汪姓の支配する大姓村落であるが、ここは徽州独特の奴僕、佃僕、世僕などと呼ばれる下層民が大姓に従属して生活しており、大姓のために多くの家役労働に服していた。その中には「拳闘庄」或いは「郎戸」と呼ばれる比較的地位の高いグループがあつて、もっぱら主家の汪姓のために他の村との戦闘に従事する私兵の役務を担っていた。⁽²⁾このような状況では、戦死者はこの世僕から出る道理で、大姓の主家汪氏からの戦死者は出ない。戦死者の英霊を祀る英雄祠、義祠は建てられるが、小姓の英霊は汪氏にとって深刻な同情と畏怖の対象ではなく、その祭祀についても熱意を欠く傾向があつたと思われる。このような事情は大姓村落に普遍的な現象であつた。例えば、広東新安県の南部平原地区（現香港新界）の同族村落の場合、村落の間に械闘が絶えず、各村では戦死者の英霊を英雄祠に祀ってきたが、小姓村落ほどこの英霊祭祀に熱心で、現在も英雄祠の香火を絶やさないと多いのに対し、大姓村落では、戦死者が同族でないため（細民と呼ばれる小姓が多い）、英霊の祭祀には冷淡で、英雄祠がすでに香火を絶やし、その祠廟さえも傾いて廃墟になつているところが多い。この状況が英雄劇の衰退、消滅をもたらすことは明らかであろう。

反面、この体制の下では、大姓宗族の支配原理である儒教倫理、例えば「忠孝節義」などの徳目が構成員に強制される結果、孝子や節婦として徳目に殉ずる犠牲者が出やすくなる。強制されて科挙の受験や商業に赴く孝子、他村から嫁いできて夫の離郷（科挙受験、客商）の留守を守り、舅姑に仕えてその圧力に耐えきれずに自殺する節婦、若死にした夫に殉死する烈婦など、この大姓宗族秩序の内部矛盾から生ずる犠牲者の孤魂こそ、この体制にとって最も大きな畏怖の対象であり、孤魂祭祀は他姓の戦死者の英霊よりも自族の烈婦の冤魂鎮撫に向かう。安徽省徽州府歙県城内の斗山街の入り口に建つ吳廷遴の妻孫氏の貞節を顕彰する旌表

牌坊⁽³⁾（口絵写真①）、及び同県西郊の鮑氏棠樾村正面に建つ族内烈婦を祀る烈女祠（口絵写真②）、更には同村郊外に建つ「忠孝節義」の族人を顕彰する七基の旌表牌坊群（口絵写真③）など、今に残る巨大な石造建築の偉観は、明清江南大姓宗族が族内の婦女に対して、いかに「貞烈」「貞節」を奨励したか、反面またいかにその冤魂の祟りを恐れたか、を示すものである。

以上のように、雑姓村落の英雄劇、大姓村落の烈婦劇という類型対立の軸を設定した上で、中国全土の状況を概観してみると、雑姓村落の地域が圧倒的に多く、大姓村落は江南の限られた地域に偏在するに過ぎない。また、大姓村落であっても、時代を宋代以前に遡らせれば、雑姓村落の時期を経過している。従って、中国の初期演劇は、雑姓村落から出た英雄劇が主流を占めており、江南の大姓村落を基盤に発達した女性劇は全国的に見れば、少数派に属すると言える。しかし、演劇史の上では、明代以降、江南の大姓村落において発達した烈婦劇系統の女性家庭劇が、中国の演劇戯曲の主流と見なされてきた。その理由は江南地域が明代以降、中国の経済文化の先進地域として社会的に高い地位を占めてきたからである。

しからば、なぜ江南だけに烈婦劇の背景をなす大姓村落の組織が発達したのか、また、それはいつ、どのようにして成立したのか、それは中国の社会史の問題であるが、演劇史の問題にも密接に関連している。本書では演劇史に関わる範囲内において、この大姓村落の組織問題を検討することから議論を開始することにしたい。